

東方ド・コア

咲夜ブランドー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

幻想郷にOWを操る程度の能力の少年が幻想入り  
処女作ではありますが、  
これを見てる貴方にとっても  
悪い話では無いと思いますが？

# 目 次

その力で、貴様は何を守る？

目覚め

認められない事実と出会い

買い物に行こう その1

20 14 10 1



# その力で、貴様は何を守る？

ごく短い声明が日本に発信された。

a r m o r e d c o r e 6 t o d a y, r e l e a s e s t a r t  
それは、全てのフロム信者への明確な発売開始宣言であつた。

それは、彼らを動かすには十分過ぎた。

そして、これが運命の始まりであつた。

一人の少年がすこしばかり古ぼけた店から歩みくる。

そう、彼こそがこの物語の主人公である

「坂本 雅」である。

片手には綺麗にパッケージされた薄い箱が入つてゐる袋がぶら下がつていた。  
「いやあ、遂に来たか。アーマードコア6!!!」

袋から薄い箱を取りだし、歩きながらじっくりと見つめる。そこには黒いACが写つていて、前作よりは少しばかりシンプルな機体だ。  
「速く帰つて、やるぞおおおおああ!!」

## 2 その力で、貴様は何を守る？

彼は自分の興奮を周りには聞こえないように宣言する。

(力チャン フオオオ ツーー!! ああ、O Bがあつたらな ←  
懐かしいものを思い出す)

「さてと、走つて帰りますか。」

彼は箱を袋に戻し、走ろうとした

「あ……」

彼は失望した、自分は知らない内に道路の真ん中に飛びだしていたのだ。だが、気づいたときには既に遅かった。すぐ目の前に大型のトラックが迫っていたのだ。恐らくは、高い位置にある運転席からは彼が見えていないのだろう。

(運命を受け入れろ)

轢かれる瞬間に彼はそう聞こえた気がした。

バーン

辺りには赤い鮮血が飛び散る。

(認めない……こんな終わり方は嫌……だよ。)

赤く彩られた場で彼は息をしなくなつた。

彼の耳に鳥のさえずりが聞こえる。  
風の音が聞こえる。

(…こは?)

彼はゆっくりと目を開けた。

先程まで身体中に染みていた鮮血は綺麗さっぱりと無くなっていた。そしてAC6  
も。

「森?」

彼はゆっくりと立ち上がり、周りを見渡した。

「見渡す限り、森……ハア?!」

彼は困惑した。無理はなかろう、先程までのコンクリートで出来た場所ではなく、緑  
で彩られた森にいるのであるから。

「ハハツアハツハツ……」、この程度、俺は認めんぞ!な、何なんだよ、何が起き  
た!?くそ!何だこれは!? そうだ、俺は死んだ、死んだよ……だが何だこれは?人は死  
んだら森に行くつてのか?

ああ、そうだ。墓だ!墓に埋められて俺は幽霊になつたんだよ!それしかありえ

ん

彼は時々顔をグレゴルーの様に顔を必死に叩きながら歩く、しかし叩く度に顔に伝わ

#### 4 その力で、貴様は何を守る？

る痛みに次第に彼は自分が生きているのだと実感した。

（これだ！この感覚だ！生命だ！ちゃんと、……生きている……ハハ……良かつた）

彼は赤く 少し火照った手で胸を撫で下ろし、  
黙々と森を歩きつづけた。

しばらく歩いていると、彼はナニカニつけられて  
いる感じた。後ろからは足音が聞こえてくる。  
それも結構な音だ。まるで最初からスニーキング  
するつもりなど元より無いのかもしれない。

（くそ、何だこれは！なんなんだよ、後ろの奴は！?  
肌がピリピリと痛む。まずいぞ！）

彼は必死に後方を確認しようと首を回そうとした  
だが、その度に首輪に繋がれた狗の様に何かに

前を向かせられる。足音はどんどん近づいていた。相手が近づいてくる度に相  
手が人間では無いことを仮定から、証明へと変えてくれた。

「ガルルルウ……」

後ろから突然鳴き声が聞こえた。雅はただでさえ  
ビビつっているのにこんな声が聞こえたため、身体中に悪寒走り、ビクツと身体が震え  
た。

遂に彼は後ろを瞬時に向いた。

「あ……ああ！」

彼は絶望した。目の前には二足歩行をしている  
デカイ狼の様な化け物がいるのだから

「ひっ！！・がはあ！！」

彼が悲鳴を上げた次の瞬間には化け物に片手で  
空中に投げられていた。

ドサアッ

化け物から10m程離れた所に彼は投げ捨てられた。

「うぐア…はあ、はあ、かはあ……」

地面に強気たたき付けられ肺の空気が全て抜け、  
必死に彼は呼吸をしていた。

彼は自分の身体に鞭打ち、化け物から倒れた状態で必死に後ずさりをしつづけた。  
化け物はどんどん近づいてくる。

(あ、ああ、嫌だ！死にたくない！)  
「はあ、はあ、はあ、うぐう」

ゴツ

彼の背中に固いものが当たつた。  
ゆっくりと後ろを向く

「なっ！」

彼の後ろには絶壁が広がっていた

(は、ハハ。死ぬ？また死ぬのか？化け物はどんどん近づいてくる。終わり、終わつた、

終わつた)

彼は壁に背中を預け、自らの死を受け入れた

「ブルウウウアアアア！ガルルルウ！」

化け物はよだれを垂らしながら近づいてくる

彼の身体に力が入る

(終わりいか、此処までか：)

今までの思い出を思い返しながら待つていると

彼の頭にピピツと機械が発生させるような音が響いた、彼は単なる幻聴だと思つていつたが次の瞬間、幻聴ではないと確証する

(メインシステム、パイロットデータの認証を  
開始します。メインシステム戦闘モード 起動)

「は？なんだこ…」

突然彼の身体が前に押し倒された感覚に襲われ、ゆっくりと立つ  
彼は後ろを即座に振り向いた。

プシュー

背中から白い煙りが僅かに出る

そこから現れたのは彼が何度も、何度も見た兵器が背負わっていた。

「グ、グラインド…ブレード…」

ガコン

鈍い音をたててブレードユニットが右腕に手錠をかけるように装着され、左肩にアームが接続され

ブレードが展開した

(不明なユニットが接続されました。システムに深刻な障害が発生しています、直ちに  
使用を停止してください。)

酷くノイズのかかつた音声が響く

ブレードは展開されたままで刃だけがギュインギュインと音を立てて回転している

「なんだよ、これ！目の前が！！くつ、す、砂嵐！？」

……これで、やれってか!!」

目の前の化け物は彼の視界が砂嵐で見えにくくなっているとはいえ、首を傾げているのがよくわかる。

「グルルルウ！グゥアア！」

化け物は決心したのかこちらに向かつてきた。

「うおおおおおー！」

雅もそれに対抗するよう走ろうとするが、

OWが重かつたのか小走りで近づいた

化け物は両腕を振り上げ振り下ろす

しかし、瞬時に彼が目の前にはブレードをかざす

ズバーン

雅の目の前に大量の血が飛び散る

化け物の腕がミンチにされていたのだ

「グアアアアアアアアアア！」

「んン!!」

雅は化け物から少し距離を置き、相手を見る

腕が繫がつていた所は肉がチリヂリになつて  
いた  
足元には原型をも留めていないミンチが落ちていた

「グオギヤアオオオオオ！」

化け物は奇妙な雄叫びを上げながら森の奥へと走つて行つた

「はあ、はあ、お…わつ」

ドサアツ

OWに体力を持つて行かれた為か、雅は勢いよく倒れた。ブレードの刃は止まつてい  
た

# 目覚め

鳥の鳴き声、そして木々が風で揺れる音が彼の耳に響いた

「ん……」

目を覚ますと見慣れない天井があつた  
いかにも木造住宅という雰囲気で、シミがちらほらとあり、少し年季を感じさせる  
彼は身体を起こし周りを見回した

「ここは……森ではない……」

畳敷きの床にタンス、障子

そして彼の近くには縁側があつた

恐らく鳥の声は縁側の外にある木からなのだろう

(見た感じ木造家屋か? 誰かが助けてくれたのか…)

彼はぬくぬくと温まつた布団から出て、黒いズボンに付いたゴミを払い落とし、縁側

の方に脚を向けた

外には小さな小屋や石畳があつた

『そしてその景色の中には少女がいた』

紅い巫女装束を纏い、髪には大きなリボンをつけていた  
彼はそれに目を奪われ一瞬の思考のあとに硬直した

(あれは、博麗靈夢?!いやまさか…)

(しかし!…あれは!!!)

彼が驚きと困惑で固まっている所に彼女は気がついた  
「あら、意外と早く目を覚ましたのね」

彼女は箒で落ち葉を掃くのをやめ、微笑しながら言つた

「あ、あの…えっと…はいい…」

「ちよつと待つててね、今お昼にするから」

雅の歯切れの悪い返答に対し彼女はそう言い放つと小屋に箒をしまい、彼が寝ていた部屋から奥へと歩いていった

(え、なんで?!あれって…コスプレじやあないよな…)

(何かのテスト??:そんな訳がない!!)

(じゃあ俺は幻想入りでもしたってのか?!フツ、笑わせる…)

自分の考えに対しツツコミをし、ゆっくりと彼女の向かつた先へと行つた

その先には広い部屋に真ん中にはポツンとちやぶ台が置かれ、周りには座布団が敷いてあつた

彼女はその先の部屋に立っていた

(釜? てことは台所か)

(しかしどうしようか…、取り合えず手伝いでもするしか…)  
彼は台所の入り口にあつたサンダルを履いた

(妙に現代っぽい代物だな、それに俺の靴下がない)

そんな事を考えながら彼女の後ろに立ち、彼は

「あのお…何か手伝えることはありますか?」

「あく、傷の方は大丈夫なの? 結構やられてたみたいだけど」

「え? 傷…」

彼は来ていた黒いシャツのボタンを何個か外し、確認した

彼の胸は包帯で巻かれていた

彼は包帯で巻かれた部分を指先で押してみたりしたが、特に痛みは感じなかつた

「大丈夫です、すみません…治療までしていただいて」

「あ、それ私じゃないわよ」

「魔理沙の奴がアンタを森の中で見つけて、ここまで運んできたのよ」

「え、魔理沙さんが…?」

「そ、まあ大丈夫ならそれでいいわ」

「じゃあ、ご飯食べ終わつたらキツチリとその分働いてもらおうかしらね」

彼女は顎に手をあて、少し考える素振りをしてから

「まあ、特にしてもらう事もないから……そうね、さつき箒をしまつた所は知つてゐるでしょ？」

「まだ掃き途中だから、それやつといて貰える？お昼出来たら呼ぶから」

「あ……はい！分かりました」

靈夢が料理に戻ると彼は外へと行き、箒で落ち葉を掃き始めた

（見渡す限りモリ……と山、集落のようなものもある）

（やつぱりこつて幻想郷なのか……、靈夢？さんは俺の事を魔理沙さんが助けてくれたと言つていた）

彼は、今日の前に広がる景色、紅い巫女服の彼女とその言動、そしてあの時の化け物から認められるはずもない考えが、どんどん確信へと変わっていくのを感じていた

（ここは幻想郷なのか……）

# 認められない事実と出会い

「ちよつとーーお昼出来たわよ！」

彼が思案しながら箒で掃いている所に巫女服の声が響いた  
「あ、はーい！」

最後に2、3回掃いてから彼女の元へと足早に向かつた

ちやぶ台があつた部屋に戻ると、机の上には日本食と湯呑が置いてあつた  
ご飯に味噌汁、それと焼き魚というメニューだ

（正直言つて腹が膨れるような量じやないな…）

そう、ご飯も味噌汁も茶碗の半分あるかどうかという感じで、魚に至つては箸の3分  
の2程の大きさのが一匹しかない

（普段からひもじい生活なのだろうか）

そんな事を考えていると

「なに？文句でもあるわけ？そんな所に突つ立つて」

「ああ、いえ…そういうわけでは無くて…」

彼女の言葉にドッキリとしながらも、座布団の上に腰をおろし箸を握った

彼女は一口で魚を頬張ると、凄い勢いでご飯と味噌汁をかきこんだ  
 (は、はやあ…)

雅がゆつくり味噌汁を流し込みながらご飯を食べていると、目の前の彼女は箸の先を  
 ガジガジと齧りながら、ただ一点! 雅の焼き魚をジーっと見つめていた

「あ、あの! これ、どうぞ。そんなにお腹が空いてる訳でもないので…!」

雅はその様子に気づき愛想笑いを浮かべながら彼女の皿の上に手つかずの魚を置いた

「あらー! 気が利くじゃない!!」

彼女はにつこりと笑い、これまた一口で平らげてしまった

彼は茶碗一杯あるかどうかの昼飯を食べ終わると、口を開いた

「あの、助けていただいてありがとうございます!」

「ああ、別に良いのよ。仕事だし」

「えと…あなたの名前は?」

『私は博麗霊夢。楽園の素敵な巫女よ』

『博麗…、樂園…』

「ここは幻想郷。」

「幻想郷つて、そんなまさか！…」

「信じられないのも分かるけど、事実よ。ここは外の世界と隔絶された場所。アンタはたまたまこちらの世界に迷い込んだって所ね」

「迷い込んだって…」

雅は靈夢の説明された事に対して困惑していた

確かににもしかしたら、なんていうことは彼も考えていたがここまでキッパリ言われてしまったのだ

何しろ幻想郷なんてのは創作物なのだから

存在なんてするはずが無い

そんな例外が…

「だいぶ困惑してるみたいだけど、まあ安心しなさいな。ちゃんと外の世界に返してあげるから」

雅は震える手を見ながら言い放つた

「そ、そうだ…俺…」

「外の世界で…し、死んだはずなんです！身体から出た血の事も！痛みも！」

「し、知らないわよ！そんな事言われても…」

靈夢はむすつとした感じになってしまい、そんな彼女に雅はそれ以上追求することが

出来なかつた

「あ！じゃあ魔理沙さんが自分をここに運んできた時に何か背負つていませんでした？」

「え？ここに運び込まれてきた時には特に何も無かつたけど、何か持つてたの？鞄とか」「実はその…こっちの世界に来た時に化け物に襲われて、その時いきなり背中に武器が現れて…」

「んで、それで追い払つたつて事ね。にしてもあの怪我はその時出来たものだつたのね。私はてつきり胞子にやられて、なんかあつたのかと思つてたわ」

「胞子？つていつたい…」

「アンタが倒れてたのは魔法の森つて言つて、普通の人間にとつちやヤバイきのこがあるのよ。まあ、妖怪にあつたのは不運だつたわね。けど…そのアンタの背中に現れた『武器』つていうのは？」

「その、なんか、巨大なブレ：剣が現れて」

「剣？ふむ、もしかしたらアナタ：能力者かもしれないわね」

「能力つて…」

「私にもあるわ、『空を飛ぶ程度の能力』が。ねえちょっと見せ…」

「なんの話してんの？靈夢」

突然靈夢と雅の会話の中に少し男っぽい女の子の声が出てきた

その声の主は黒い帽子に白いリボン、黒い服に白いエプロン…まさにいかにも、とう感じだつた

「あら、魔理沙じやないの。来てたのね」

「魔理沙、さん…」

「おう！霧雨魔理沙、魔法つかいだぜ！えーと…」

「自分は坂本雅と言います。森で倒れてた時は本当にありがとうございました!!」

「あはは!!なあに、いいってことよ。よろしくな」

「それより、あんた：能力があるんだってな！見せてくれよ！外来人で能力持ちなんて珍しいんだ！な！いいだろ?!」

「そうね、私もアンタの能力に興味があるわ」

魔理沙の言葉に靈夢も同じ気持ちのようだ

魔理沙に関しては相当興味があるようで顔を少し赤らめていた

「あ、いや…自分もどうやってやるのか分からなくて…」

「うん、そうだなあ。強くイメージすればいいんだぜ」

「そうね、一度出せたんでしょ？その時見たのをイメージすれば良いのよ」

靈夢と魔理沙の言葉に若干の戸惑いを感じながらも、座布団から立ち、目を瞑つてあ

の時だした『グラインドブレード』の事を強くイメージした  
しばらくすると突然背中がグツと重くなり、同時にブシューという音と冷気を感じた  
「「「これは…！」」

その背中には鉄塊が背負われていた

# 買い物に行こう その1

彼の背中には、まさに「鉄塊」があつた

背丈程もある6本のチエーンソー、飛び出たパイプ、むき出しのフレーム  
確かにそれは、対警備組織規格外六連超振動突撃剣

——グラインドブレード——

「なんだよ雅！お前すごいじやんか！！くう、カツコイイ！」

「あ、あたしも驚きだわ……まさかここまで…」

恐らくその時一番動搖していたのは彼だろう

彼が背負っているものは「創作物」に過ぎないのだから

あれから数日が経つた

あの後霊夢さんと魔理沙さんに手伝つて貰いながら自分の能力のことを調べた  
俺は全てのOWを使うことが出来た。実際に攻撃手段としても…  
が、特に人を殺せる程のものではなく弾幕ごつこなんかで使える威力のものだそ�だ

勘のいい靈夢さんとあの魔理沙さんが言うのだから信用していいだろう

だが使用後は体力が使用時間に比例して消耗されるというのも分かつた。長時間の使用は厳禁ということ

そして使用時には視界がACVのように戦闘モードの画面みたくなるというのも分かつた

スキヤンモードでは人をスキヤンすることは出来なかつたが、数十メートルとしか言いうがないがどこに人がいるのかが障害物越しにも分かつた

それでもつて、最後にブースターだ

これまた度肝を抜かれた。イメージをすると身体の周りに赤い魔法陣が現れて、そこから火が吹くなんてものだつたのだから

仕様に関してはゲームとほとんど一緒だつた

吹けば体力は減るし脚についてなきやグラブも出来ない

ただ違つたのはどの方向でもグラブは切れないということくらいだつた

本当に：なんでこんな力を持っているのか、俺には分からん

あの時死んだはずなのに今生きているのも……

今はこの幻想郷に留まる事にし、人里で仕事と家が見つかるまでアルバイトのような

事をしている

能力のおかげで妖怪の出る危険な場所にも行くことが出来るから金の払いも良い

今はここ、博麗神社に居候をさせてもらつていてる

俺が稼いでいること也有つて靈夢もご飯を人並みに食べられている

「雅ーー！朝ご飯出来たわよー！」

「分かりましたーー！」

縁側で飲んでいたお茶を片付け、居間に向かうとちやぶ台の上にはいっぱいに盛られたご飯や味噌汁、大きな焼き魚や野菜が置かれていた

(2, 3日まえからご飯も普通の量を食べれるようになつて、飯時の靈夢さんもご機嫌な様子でホントに良かつた…。居候の話が出たときには靈夢の鋭い目つきで殺されるかと思つてたからなあ)

「さあさ、どうぞお召し上がりくださいなー雅さまー！」

「あ、はあ…」

(ただまあ、こうやつて茶化してくるようになつたのは少し困るが…)

「いやあ、ホント一時はどうなるかと思つたけど、もう最高ね！」

につこりと眩しい笑顔を浮かべながら靈夢は、まさに年相応の少女という感じだつた朝食を終え、食器を洗つていると

「あ、そうだ。今日アンタの服とか色々買いに行くから」「え、そんな急に言われても困るんですけど…」

「ま、いいじゃないの！仕事の方は休んで。どうせ人里にも行くんだし」

「…」

「そうそう、魔理沙も一緒に行く予定だから。もう少ししたら来ると思うわ」  
（雇い主には申し訳がないが、仕方ないな…）

皿洗いが終わると外から元気な声が聞こえた

「おーい！ 霊夢ー！ 迎えにきたぞー」